

テレビがもたらす時間意識の再考

——1950年代の放送時間・番組編成の分析から——

静岡文化芸術大学 加藤裕治

1 目的

本報告では、戦後日本社会において現れた放送メディアであるテレビが、人々の時間意識の編成に果たした役割を（再）検討する。これまで、ラジオやテレビといった放送メディアが人々の時間意識の形成に果たしてきた役割について、多くの言及がなされてきた（藤竹 1983; 水越 1993; 竹山 2002; 吉見 2003→2016 など）。こうした言及では、放送メディアが時間意識の整序と統合を進めたという点、つまり放送メディアが時間意識を統合するという側面に焦点があてられてきたと考えられる。この背景には、ナショナルな意識の統合装置としてテレビが想定されていたことも影響しているだろう。

一方、本報告では、放送メディアがナショナルな時間意識の統合の側面だけでなく、重層的な時間意識を創出した可能性について調査・分析することを目的とする。特に今回は、戦後のテレビ放送が開始された 1953 年以後の 50 年代を中心に、当時のテレビの放送時間・番組編成について分析することで、同時代の視聴者に対して、既存の放送メディアであるラジオとも異なる形で産出された時間意識について考察する。

2 方法

同時代の新聞の「ラジオ・テレビ欄」、各放送局の社史・沿革史、その他、『放送文化』をはじめとする放送業界関連誌、またテレビ草創期に関わる当時の人々の証言（文献資料）などを参考にし、それにより、1950 年代のテレビ放送の放送時間の変遷や番組編成、番組内容の傾向を把握するとともに、当時の人々のテレビ視聴の傾向や意識等を把握することを試みる。

3 結果

初期テレビの時代、ラジオに対して限定された時間において放送されたテレビであったが、夕刻から夜間の時間帯を中心に放映されたことの意味を再考する必要がある。それは夕刻から夜間の人々の時間消費の傾向を変容させた。つまり視覚的なテレビというメディアと共に過ごす時間が生活時間を重層化し、メディアを「見る」時間としての夜間を創出したといえる。こうしたメディアによって創出される時間消費のあり方が、人々の時間規範や時間意識へ与える影響を考察する必要がある。

4 結論

本報告では、初期テレビ受容を時間意識の変容の観点から論じることにより、社会学的なテレビ論におけるこれまでの知見に対する新たな見方・視点提供し、メディアと社会の関係について再考することをめざす。

文献

藤竹暁,1983,「ラジオ体験からテレビ体験へ」北村日出夫・中野収編『日本のテレビ文化 メディアライフの社会史』有斐閣選書, 34-69.

水越伸,1993,『メディアの生成 アメリカ・ラジオの動態史』同文館.

竹山昭子,2002,『ラジオの時代』世界思想社.

吉見俊哉,2003→2016,『視覚都市の地政学 —まなざしとしての近代—』岩波書店.